

オーストリアで豊富な文化を体感

旅行会社の役割考える機会に

全日空（NH）が2月17日に羽田／ウィーン線を開設したのに合わせ、トラベル懇話会は3月12～18日、ウィーンとザルツブルクの2都市を訪問する研修旅行を実施した。海外研修旅行は今回で30回目。団長の原優二会長（風の旅行社代表取締役社長）をはじめ、17人が参加した。

ウィーン線は羽田1時55分発、同日6時に現地到着。欧州各都市に同日乗り継ぎが可能だ。復路はウィーン11時50分発、羽田到着は翌6時55分。日本で仕事を終えてから羽田へ向かい、帰国日もそのまま出勤でき、ビジネスマンには便利である。観光客にとっても日数の割に滞在時間を長く取ることができ、十分に観光を楽しめる。

今回の滞在中、オーストリア政府観光局、ザルツブルク市観光局、ウィーン市観光局を表敬訪問した。表敬訪問は観光地案内や集客のお願いに偏りがちだが、伝統ある芸術の都という自負からか、「よろしければ来てください」という余裕がうかがえ感心した。日本人の平均宿泊数は1.9日だという。観るべきものが多いこの国で、この日数で十分なのかと思ったのは私だけではないだろう。

食は外せない観光要素

モーツァルトが生まれ、映画『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台ともなった町がザルツブルクだ。郊外には美しい山並みが広がり、新市街から見た市内を流れるザルツァッハ川とマカルト橋、旧市街の風景は旅情を誘う。

ウィーンでは、名画の宝庫である美術史美術館で誰もが知るブリューゲルやフェルメールなどを鑑賞し、シェーンブルン宮殿、クリムトのコレクションがあるベルベデーレ宮殿などを見学した。夜にはクアサロンでワルツコンサートを楽しんだ。

650年続いたハプスブルク家は欧州各国と婚姻関係を結び、多くの食文化がウィーンにもたらされた。イタリアから持ち帰ったとされるシュニッツェル（カツレツ）。ハンガリーから伝わった煮込み料理のゲーラシュなどが代表例。ハプスブルク家は甘いものが好きだったといい、食体験ではケーキも外せない。庶民的な酒場「ホイリゲ」も魅力的だ。葡萄畑を持つ醸造所が手掛ける酒場のことで、ワインや一品料理を観光客も気軽に楽しめる。そして忘れてはならないのがカフェだ。社交や情報発信の場として活用されてきた。クリムトやマーラーなどが通ったという「ラントマン」で到着時に朝食を取れたのも良い経験となった。

オーストリアは、文化、歴史、芸術にあふれる安全な国だ。さまざまな切り口で旅を深り下げることができることは間違いない。一方で、ふと思いついて航空機とホテルをネットで予約し、シティカードを買ってトラムで市内を回る。それができるのもオーストリアだろう。帰国後、われわれ旅行会社の果たす役目を考えていたが、いまだ答えは出ない。多くの気づきがあった旅でもあった。

最後になるが、ご協力いただいた各観光局、ANAセールス、ミキ・ツーリストの皆さまに心からお礼を申し上げたい。



上／参加者17人が2都市を視察し、ウィーン市観光局などを表敬訪問した 左下／ウィーン市内では豊かな歴史や文化が随所に 右下／ザルツブルクの町並み

文・写真／戸井川裕美子（ピコ代表取締役社長）